

特集

広酪メンバーズクラブから

がんばろう日本
がんばろう酪農



全国酪友フォーラム

被災者の生の声に涙

復興・復旧を願って全国から360名を超える酪友が結集

(7月14日から15日 北海道札幌市)

全国酪農青年女性会議主催の全国酪友フォーラムが開催された。広酪メンバーズクラブから宮地健司委員長と住田佑樹さん(東城町)、伊藤泉技師(広酪事業推進課)の3名が参加した。

この大会は「第41回全国酪農青年女性酪農発表大会」として開催される予定であったが、3.11の東日本大震災を受けて、全国の酪農家が被災地の酪農家を勇気づける応援大会に切り替えて企画されたもの。口蹄疫や大震災で被災した酪農家の生の体験談を聞き、復興支援に向けた支援とエールを送った。

被災者の思いを共有

(大井委員長)

開会にあたり、大井幸男委員長(全国酪農青年女性会議)は「口蹄疫や東日本大震災で被災された酪農家の思いを共有し、日本を元気にする酪友フォーラムにしよう。頑張ろう日本!頑張ろう日本の酪農!」と力強く会場に訴えた。

口蹄疫を経験して 発症農場と ワクチン接種農場

宮崎県の酪農家の発表

黒木 俊勝さん(川南町)

黒木さんは、経営規模を徐々に拡大し、やっと目標頭数に近づいた五月五日、口蹄疫の症状(泡立つよだれと乳頭の水疱)が現れ、九日に陽性との判定で、同月十三日には全頭殺処分を強いられた。症状が伝播し、牛の気性は荒くなり搾乳ができなかったことがとても辛く悲しかったと、臨場感いっぱい話された。

佐田みり子さん(新富町)

佐田さんは、ワクチン接種後から、全頭殺処分となるまでの間、飼養管理と搾乳作業に精を出された。接種後の生乳は、全頭殺処分となるまでの間「集乳車」から「衛生車」に変わりこの現実には落胆。殺処分後は、複雑な思いが回想する中で、正直ホツとした気持ちになった。多くの犠牲があつたからこそ口蹄疫が終息した感は否めない。と苦渋の思いを話された。



現在は両牧場とも北海道から初妊牛を導入し、新しい家族と共に再出発を導かれている。口蹄疫の苦い経験から「細霧装置」で木酢を噴霧するなど消毒励行の徹底に努められている。

東日本大震災の体験
〜千年に一回の
大津波に遭遇〜

宮城県の酪農家 及川義紀さん

気仙沼市で牧場を営んでいたが、津波で自宅と牛舎が無くなった。近くの高台に避難し、津波で牛舎の屋根が流される様子は、まるで映画の一シーンの様であった。避難当初は、一人あたり一畳以下のスペースに、食事は一日二食の生活を強いられた。初日には「今日から搾乳しなくていいんだ」と考えたが、牛を探しに出たところ、未經産牛一頭は見つける事が出来たものの、八頭は不明で、二頭は死体となっていた。未經産牛を見つけた時に牛が鳴きながら近寄ってきたものの、捕獲に苦労した。瓦礫の中を歩きながら難を逃れた放牧場へ連れて行き、我が家を出したのか、あと一キロという付近から牛が自ら歩き出した。

現在は知人の牧場で酪農に励んでいるが、今まで普通だったことが物凄く幸せに感じた。「がんばろう気仙沼、がんばろう日本、がんばろう東北」と会場に訴えられた。

頑張っぺ茨城!
頑張っぺ酪農!

茨城県の酪農家 橘富士子さん

橘さんは経産牛四十頭、育成牛十五頭を飼育。地震が発生して液状化現象や飼料タンクが倒壊する農家もあつたが、同牧場では物理的被害は少なかった。しかし、生乳は地震と停電の影響で連日、自家廃棄となり、やっと集乳再開となった矢先、放射能の影響で再び自家廃棄を強いられた。

共通廃棄場所は各組合、県酪連が主導で県内各地に設置した。

今回の震災を受けて

『Time is Money』よりも『Milk is Money』と感じた。これからも風評被害に負けず、自分に出来ることからやっつけていこうと「頑張っぺ酪農、頑張っぺ茨城」を訴えられた。

ふくしまの酪農
負けねえぞ

福島県 鈴木正隆さん

津波で住宅が全壊し、現在もガレージ生活を強いられる毎日。原発事故が起こり、仲間が離れ離れになつてしまった。国・東電に対しての怒りが収まらない。全ての責任を取って貰いたい。生乳廃棄で今後の風評被害も心配。こんな胸中にある折、北海道からメッセージ入りのロールが届けられた。本当にありがたかった。

また、仲間がいたから酪農の希望と夢が持てた。

「ふくしまの酪農 負けねえぞ決起集会」を立ち上げ、復興、新しい酪農を目指して、「一、震災に負けねえぞ」「二、原発に負けねえぞ」、「三、風評に負けねえぞ」と、「将来の幸せのため負けねえぞ福島!!」と宣言。「思いが熱い内に政府は見通しを立て、実行してもらいたい。まだまだ福島は負けません」と力強く訴えられた。

パネルディスカッション



小林信一教授(日本大学生物資源

科学部・写真左端)をコーディネーターに迎え、発表者を中心にパネルディスカッションが行われた。

「**一回蹄疫・震災・原発。当時の状況とどのような思いだったか。今後の見通し等の意見**」

■乳を搾れない辛さ

▼(宮崎)八月二十七日に終息宣言され、九月は週に一回消毒、石灰を巻いた。十月に三頭の供試牛を入れて安全かどうか確認した。家族で話し合い、牛舎の改善点を見直した。前を向いていないと落ち込む。酪農家として乳が搾れないのが辛かった。

■乳代無く、義援金が生活の支え

▼(宮崎)五・六月乳代無しで、自分の蓄えと義援金で生活した。再開も危ぶまれたがいろんな農家から助けを得て現在に至っている。

■組合対応に感謝

▼(宮城)乳代の九割分を組合積立を崩してもらって受け取った。組合の対応に感謝している。仲間がいたから再開

できた。このように全国の酪友に会えてとても励みになる。八月に仮設住宅に入る。

■乳代が入るありがたさ

▼(茨城)地区によって被害は様々で、液状化現象で廃業された酪農家も何件か生じたが、想定していたよりは被害を免れた。発電機を使いまわして搾乳した。いくらかでも乳代が入るのがありがたかった。

■豚が死亡牛を食し

▼(福島)原発十九キロ圏内は三十戸ほど酪農家が存在。愛情を注いだ牛をスタンションに繋いだまま避難した。一時帰宅した時には牛は全頭死んでおり、動物愛護団体が勝手に離した豚が死んだ牛を食べていた。今は死んだ牛を自分達で処分している状況。和牛農家は北海道で土地を探そうと考えている。若い仲間は共同経営を考えている。

■放射能で「草」は全滅

▼(福島)原発三十キロ圏内で酪農をしているが現在休業中。放射能で草は駄目になり、自給飼料農家は大変厳しい。購入飼料では赤字になる。牛を乾乳にして避難した。

今、一生懸命やろうとしている農家を助けてほしい。

日々徒然
かがやき



▼八月六日、あの夏から六十六年。今年もヒロシマは暑い「原爆の日」を迎えた。被爆者の平均年齢は既に七十六歳。原爆の悲惨さ、そして核廃絶を訴える「語り部」活動を映像に残す作業が急ピッチに進められている。

▼3・11の東日本大震災から五か月が経過したフクシマは、「福島」ではなく「フクシマ」として表されている。「フクシマ」と「ヒロシマ」、どちらも放射能の影響を受け、津波によって破壊された町並みと被爆直後の何もないヒロシマが重ねられる。皮肉にも、その原因はどちらも人災という共通点がある。

▼我々も小・中学校では、日本が侵した侵略戦争や原爆を題材にした映画を鑑賞し、中には気分が悪くなる者が出る程の生々しい映像もあった。特に夏休み期間中に行われる平和学習では、戦争の実体験を聞くことが多かった。その魂を込めた反戦、反核の訴えは

■先が見えない

▼(福島)三ヶ月乳代を借り入れ、返済が半年後となっている。先が見えない。全国酪農青年女性会議で主張し希望を持ちたい。

■原発で家族の絆が崩壊

▼(福島)原発二十一キロ圏内にいた。原発は家族の絆をバラバラにした。心の根底を失ったようで、希望も見られず本当に辛い。

二『酪農復興に』何をしていくべきか？何をすべきか？

▼乳業メーカーを取り込んだ支援方法がないか。例えば生乳一キロあたり一円負担して、義援金にするなど。

▼ツイッターで情報を流せば反響が返ってくる。酪農家が自分から攻めるべきで、利用出来るものを最大限利用して情報を流さなければいけない。

三被災酪農家への応援メッセージ

中山斉さん(北海道酪農青年女性会議)は「大きな試練を与えられた日本の酪農はまだまだ一般の人に正しく伝

わっていない現状がある。全国の酪農家・酪友が一丸となってこの未曾有の危機を乗り越えていこう」と勇気づけられた。

宮崎県の代表者からは「口蹄疫の発生時にたくさん助けて頂いて感謝している。今度は自分達が助ける番です」との言葉を添え、委員長に義援金を手渡された。



全国酪友フォーラム～がんばろう日本の酪農～

二若信彦氏副委員長(全国酪農青年女性会議)は「今日の発表から大きな試練を乗り越えられると確信した。今日流した涙が希望の光に変わるよう、今後とも互いに助け合い絆を深めよう」と挨拶され、「頑張ろう」を三唱して閉会した。

■全国酪友フォーラムに参加して

実際に口蹄疫や震災を体験された酪農家の生の声が聞けて本当に良かったと思います。時々、涙ながらに発表される姿に、私も会場も涙が溢れ出しました。悲惨な状況下でも前を向いて新しく出発しようとしていられる姿勢に感銘を受けました。

会場から「こんなに泣いた酪友フォーラムはない。同じ酪農家(仲間)だからこそ共有できる」と共感されていました。広島からの参加者も「参加して良かった。辛い状況の中でも前向きになれるところが凄いと感じた」と話されていました。

(広酪事業推進課 伊藤 泉)

今も心に残っている。

▼我が祖父の弟は、原爆で命を奪われた。前日五日に入隊し広島入り。翌日原爆で亡くなった。その年十九歳。今では祖父も亡くなり、その面影は父母や祖母ですら知らない。偶然、ある方から面影を聞いた。それは六十六年を経過した今、自分にも重なるどころがあり不思議な気持ちになった。

▼私たち広島県人は、被爆地ヒロシマに生まれ、原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを後生に伝える義務があるように思う。一人ひとりが「語り部」として伝承していくことの大切さ。特に祖父や祖母、家族から聞く体験談は身近にあった惨劇として心に深く刻み込まれる。そして、学校等で聞いた戦争や被爆の体験談は脳裏に焼きつき、将来にわたって強い反戦・反核の意志となるのではなからうか。他県では八月六日ですら、何の日かわからないといった風化が報じられる。カチカチで書く「ヒロシマ」、平和を今一度考え、自らが出来ることを考えてみませんか？

美湯 仙人